

## 林羅山の思想

著者	函 穎
号	86
発行年	1999
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14365">http://hdl.handle.net/10097/14365</a>

GONG  
龔

YING  
穎

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第86号
学位授与年月日	平成12年2月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 国文学日本思想史学専攻
学位論文題目	林羅山の思想
論文審査委員	(主査) 教授 玉懸博之      助教授 佐藤弘夫 教授 中嶋隆蔵

## 論文内容の要旨

本論文は、林羅山の思想を考察の対象とし、朱子の思想と比較しながらその思想の特質を把握しようとする。換言すれば日本の近世前期思想史上における新たな羅山像を創出することを目標とするものである。

序章では羅山の事績を記述した。羅山思想に関する従来の研究史を整理し、併せて研究史における問題点を指摘した。最後に、本論の課題と方法そして論文の構成を述べた。

第一章「林羅山の理気論——理の解釈を中心として」では、朱子理気論の基調を概観したのち、羅山が朱子の理気論をどう把握して、またどのように応用したのか——羅山理気論の特質、を解明しようとした。

第二章「林羅山の心性論——朱子・李退溪と比較しながら」では、朱子心性論の基調を概観したのち、特に心と性と情の関係論に注目しながら、羅山の心性論の特質を解明しようとした。

第三章「林羅山の排仏論——朱子・韓愈との比較を通して」では、朱子の排仏論を詳述した

のち、羅山の排仏論と朱子のそれとの異同を明らかにしようとした。

第四章「林羅山の孫呉兵法観——朱子・南宋事功派との比較を通して」では、朱子の軍事・政治観を記述したのち、この軍事・政治の領域について（とくに孫呉兵法観をめぐって）、羅山がどんな立場をとっていたのか、またそれは朱子の立場とどう違うのか、これらの問題を明らかにしようとした。

第五章「林羅山の文学論——道文関係論をめぐる林羅山と朱子の比較研究」では、朱子文学論の基本思想を記述し、羅山と朱子の異同を明らかにしようとした。

終章では、本論文のまとめ、羅山思想の全体像の特質、そして羅山思想の研究に関する今後の課題を述べた。

以上の考察によって、最初に記した提出者の意図はほぼ達成された、と考える。

以下、本論文の構成に従って、内容を要約して示していく。

## 【序章】

はじめに、林羅山（天正11・1583～明暦3・1657年）の事績を簡単に記述した。

次に、林羅山の思想に関する研究史を概観した。羅山思想に関する従来の研究では、羅山思想の重要な各方面がそれぞれ考察されてきたが、羅山の思想が朱子のそれと同質であるかあるいは異なるものであるかという問題をめぐっては研究者の意見が依然として一致していない。このような見解の対立は羅山思想に関する根本的な再検討を必要とする、と指摘した。

更に、先行研究の問題点を羅山思想の各方面ごとに具体的に指摘した上で、本論文の課題と方法を次のように設定した。

林羅山の思想の特質を朱子の思想と比較しながら究明することを課題とした。

ここで採った比較研究の方法は、羅山の思想を形作る主な思想的要素のうち、①理気論（思想の基底をなすもの）、②心性論（理気論に基づいて成立し、次の③具体論の根拠になるもの）、③排仏論・兵法論そして文芸論（思想の具体論）に着目し、これらを朱子の思想を形づくる主な思想的要素、①理気論、②心性論、③排仏論・兵法論そして文芸論、と逐一比較して、①②③それぞれについて異同を摘出し、もって羅山の思想の特質を究明する、という方法である。

## 【第一章】 林羅山の理気論——理に対する解釈を中心として

はじめに

羅山の理気論は朱子のそれと基本的に一致するか、それとも相違するか、この点に関する先行研究の意見の対立を指摘した上で、朱子の理気論と比較しながら、羅山の理の解釈に注目してその理気論の特色を把握する、と述べた。

## 一、朱子理気論の基調

先行研究の成果を参考しながら、朱子理気論の基調について次のようにまとめた。

理気論は朱子学の思想的基盤である。朱子において、理は人間の感覚的認識を超越した普遍的な形而上的実在である。また、理は事物の至高の標準とその存在根拠である。気は万物の具体的な姿形を形成する。理と気とは次元を異にする存在である。根源性からいえば、理は気よりもより根源的である。

## 二、林羅山の理気説

### 1. 朱子理気論の原理面に関する理解

慶長・元和期において、若き羅山は理気論の面で、朱子的な考えと陽明的な考えとの間に揺れ動いていたが、元和六年以後は、朱子の理気論を理解し、これを本格的に説くようになった——以上の石田一良説を確認した。

### 2. 理気論の応用面——理の解釈をめぐって——

元和六年以後は、羅山が朱子の理気論を本格的に説くようになったという事実もあるが、現実の具体的問題に対処する場面では、彼は朱子の理気論から離れるような理の解釈をしていた、と指摘した。朱子と比較しながら以下の手順で具体的な論証を行なった。

朱子は人間に宿っている理を性として、この性こそ人間をして人間たらしめる根拠であり、人間行動の至高の標準である、またその性の内容は「仁義礼智信」(＝「五常」)である、と考えた。これに対して、羅山の『春鑑抄』における「五常」観には朱子と異なる次の特色がみられる、と論じた。

先験的な道德律としての「仁」は「仁の具体的な実践」と同一視され、「義」も「礼」も具体的な、実際の法度や礼儀作法に読みかえられた。また、「智」も、政治を円滑に運営する手段や日常生活の心得に解釈し直された。「羅山の仁義礼智」をめぐる議論では、仁義礼智＝五常が、至高の道德的標準(太極＝理が人間世界を支える原理となったもの)だという朱子的な見地は殆ど消失していた。

また、神道関係の諸説の中で、羅山は「国常立尊」——万物を造り主宰するものを理と同一視し、理を生成的に解釈していた。羅山のこの理の捉え方は朱子の、理を「無造作」とみる見地とは一致しない。

終りに

私が新たに見出した、羅山が、朱子の理気論を頭の中では、よく理解し、これを説いている事実(理気論の原理面での受容)と現実の具体的問題に対処する場面で、朱子の理気説から離れている事実(理気説の応用面での受容)は、まさに羅山理気論の特色を示している、と結論づけた。

## 【第二章】 林羅山の心性論——朱子・李退溪と比較しながら

始めに

羅山の心性論は朱子のそれと一致するか、それとも相違点があるのか、この問題に対する研究者の意見が対立している、と指摘した。本章では、従来あまり注目されなかった羅山の心と性そして情この三者の関係論に着目して、朱子や李退溪のそれと比較しつつ羅山心性論の特質を把握することを目指す、と述べた。

### 一、朱子心性論の基調

心・性・情の関係論を含む朱子心性論の基調を次の二点にまとめた。①人間の本性は理であって完全に善なる存在である。つまり「性即理」説である。②構成からみれば、性は情の根拠であり、心が性と情とを内包する。機能からいえば、心は性を本来の姿に保たせること、また発動した後の情の正しい有様を確保すること、という二つの役割を持っている。つまり「心統性情」である。

加えて、朱子は情が性に根ざすものとみなしているので、非道德的な感情の由来を確かめ、更にその制御法を考えることに自分の思想の重点を置いてはいなかった、と述べた。

### 二、林羅山の心性論

#### 1. 朱子の心性論に対する認識

「性即理」「心統性情」を説く議論においては、羅山の心性論が外形においては朱子のそれと一致し、また、性情関係論においても、情を「四端」に限定すれば、羅山のこの点についての見解は朱子と一致する、という事実を確認した。

#### 2. 羅山と「四七理気説」

羅山は、朱子がいわば「情＝四端プラス七情」と捉えたのとは違って、七情を特別に重視して、殆ど情すなわち七情のような捉え方をしたこと、さらに李退溪の学説の一部を拡大・強調して、七情は気からのみ出る、故に七情は悪に走る傾向を強くもち、人を破滅させるものとなる、との見解を打ち出したこと、を見出した。加えて、この見地は、情を性（＝理）の発現であると捉える朱子の見地と重要な差異を持つことをも指摘した。

#### 3. 心と七情

羅山は、右の朱子とは異なる情—七情観に立って、心による七情の制御こそが修養論の要だと説いた。この点は、性（＝理）への信頼を前提とし、未発の理を涵養することこそを修養論の要とした朱子と相違する、と説いた。

終りに

本章のまとめと課題を述べた。

### 【第三章】 林羅山の排仏論——朱子・韓愈との比較を通して

始めに

従来の研究史においては、羅山の排仏論が朱子のそれと相違しないという先入観がある、と述べた。本章では、朱子や韓愈と比較しながら、羅山から見て仏教の最も大きな問題点がどこにあるのか、羅山の排仏論と朱子の排仏論との関係いかに、という二点に着目して、羅山の排仏論の特色を明らかにする、と述べた。

#### 一、朱子の排仏論について

##### 1. 仏教の教理に対する批判

朱子は、仏教の、性を空と見なし「作用」と見なす所説に自分の排仏論の重点を置いた。人間の本性に対する誤った認識は仏教教理の根本的な問題点だと朱子は考えた、という事実を確認した。

##### 2. 仏教の社会的な影響に対する批判

朱子は仏教の「滅絶人倫」などの社会的悪影響も批判した。この点に関して、朱子は仏教が社会的悪影響を起こした根本的な原因——心性論の面における仏教の誤りをもっと重要視していた、という点を論じた。

#### 二、林羅山の排仏論について

##### 1. 仏教の教理に対する批判

詳細な考察を通じて、以下の事実を指摘することができた。

羅山は仏教教理の批判において、仏教の因果応報説を完全に否定した。この点は、朱子が仏教の「輪廻・報応」説を否定する観点と一致する。羅山が「仏虚儒実」ということを説く場合、その「虚」とは仏教のもつ「偽り」を指していた。これに対して朱子が「釈は空を言ひ、儒は実を言ふ。釈は無を言ひ、儒は有を言ふ」と説く場合、「有」や「無」は理の有無を指しているものであり、仏教説の虚偽性を弁ずる意はなかった。従って、「仏虚儒実」という点については、羅山の考えは朱子のそれと相違する。また、仏や仏教を蔑視的に見ている態度も朱子のそれと異なる。後者は、仏や仏教に対する韓愈の態度にむしろ酷似するのである。

##### 2. 仏教の社会的な影響に対する批判

羅山の「社会・経済領域における排仏論」とその「人倫問題における排仏論」に分けて考察して、次の事実を見出した。

朱子も羅山も、仏教信仰がもたらした人倫破壊の悪結果を批判するが、両者が見出したその根本的な原因——仏教の最大の問題点ともいえる——は異なる。この羅山の見地は韓愈のそれと近似する。

終りに

以上の考察を通じて、羅山の排仏論と朱子のそれとの関係及びその特色について、以下のよう  
に結論づけた。

羅山は朱子と同じく、仏教思想を排斥する立場を取っていた。しかし、「仏教のどの点が最大な問題点であったか」の質問に対する両者の答えは大きく相違する。この回答の違いによって両者の排仏論の具体的な内容も異なっていたことが分かる。つまり、朱子は一貫して心性論の面一性即理の立場—から仏教批判を展開させたのに対して、羅山はこの点をそれほど重視して論究しなかった。

#### 【第四章】 林羅山の孫呉兵法観——朱子・南宋事功派との比較を通して

始めに

##### 一、朱子の孫呉兵法観

「1. 普遍的、超越的な道（＝理）」と「2. 道徳中心の軍事観」では、陳亮と比較しながら朱子の道徳中心の軍事観を確認した。一つは、朱子は現実の根本に存する「道＝理」に適うことを至上の課題としていたこと。もう一つは、朱子は絶対的普遍的な「道＝理」を信じ、皇帝の「正心誠意」による「道」の体得を軍の本としていたことである。

##### 3. 朱子の孫呉兵法

朱子は孫呉の兵法を「機心」や「陰謀」より成るものとして捉え、政治や軍事活動の中での利用を拒否した、と論じた。

##### 二、林羅山の孫呉兵法観

##### 孫呉兵法認識

羅山から見れば、孫呉の兵法は「イツハリ」であり、「己カ徳ヲ明ニスルコト」を根本とする孔孟の「仁義の道」とは違い、また、兵書の「仁義」の意味と孔孟の「仁義」の意味とは相違する。孫呉の兵法と孔孟の仁義との違いをはっきりと意識する羅山のこの立場は朱子の考え方と一致する、とした。

##### 孫呉兵法の使用について

羅山は、孫呉の兵法に対して「王者之師」＝「聖人之兵」＝「仁義之兵」の優位を認め、「仁義之兵」を軍事活動の最高理想として掲げていた。

しかし、羅山は「仁義之兵」を理想にしながら、現実には孫呉兵法の使用を容認した。この孫呉兵法を容認する態度は「王覇併用」を主張する南宋事功派の儒者のそれと似通っている。

また、羅山は孫呉の兵法（『三略』も含まれる）を軍事の領域を超えて、政治の場面でも採用しようとした。この点は、「誠意正心」の道徳政治しか説かない朱子の立場に相違し、孫呉

兵法の使用を軍事の領域に限定した南宋事功派の思想とも違うところである。

終りに

本章のまとめと今後の課題を述べた。

## 【第五章】 林羅山の文学論——道文関係論をめぐる林羅山と朱子の比較研究

始めに

羅山の道文関係論を取りあげ、羅山の考えと朱子のそれとの異同を解明するための比較研究を行う、と述べた。

### 一、朱子の道文一致論について

朱子の道文一致論

朱子の文学論の基本内容について以下の二点を論証した。

第一点、道を載せることは「文」の存在目的であり、もっといえば、文はひたすらに道を載せるためにのみ存在する、これは朱子の「文以載道」説の基本思想である。

また第二点は、道と文との関係について、朱子は、聖賢の文章は聖人の心の顕出であるので、本質から言えば、「文、便ち是れ道」である。従って、朱子が説いた作文の上達法も、理（＝徳）を窮めることを通じて聖賢の心に近づいていく方法となる。朱子は、良い文章を作る前提とその根本方法が理を明らかにすることだとする「道德・文章不二」の論を一貫して主張していた。

道・文関係論の問題をめぐる朱子の文学批評

以下の事実が確認できた。

「道德・文章不二」の論が朱子の文学批評の中で活用されていた。朱子から見れば、蘇軾と韓愈の道文関係論は、いずれも道と文とを二物に分裂させ、別々に扱う考えとなる。また、このような間違った認識を持っていた故に、両者は理を究めるための工夫が足りず、その文は足りないところがある、と朱子は指摘していた。

### 二、林羅山の「道德文章不二論」について

問題の発端

羅山も時々「道文不二」や「道本文末」を説き、用語の上では朱子と類似するような発言をしたが、韓愈・蘇軾に対する批評の中では、羅山は朱子と違う考えを持っていた。つまり、道文関係論においては、羅山が掲げたスローガンと彼の文学批評の実践との間に、大きな矛盾が見える、と述べた。

羅山の道文関係論の基本思想

羅山は彼の「載道」論と「筌蹄」説の中で、「文」が「道德」を聞き知る、更にそれを後世



に伝えていくための不可欠な手段だと繰り返して説き、「道」を伝達する「文」の役割を朱子以上に重視した。これは朱子のいう、道（理）の文（文章・文字）に対する絶対的・決定的な優位が強調される観点と違う。

羅山はまた彼の「華実彬彬」論の中で、文に道徳的な内容を要求すると同時に、文学的表現もまた別に必要だとしている。文章の内容とその表現を二つに分けて見る羅山の姿勢は、朱子によって批判された韓愈や蘇軾の文章論と共通するところを持っていた。

更に、朱子は、「窮理」を通じての人格修養が文章を上達させるための鍛練法だと見ていたので、文学者に道徳性の涵養を強く求めていた。それに対して、羅山は文章表現上の優劣を見定めつつ作文の技法を重視して議論する一方、作者の道徳性や思想傾向をあまり問題としなかった。

終りに

本章のまとめを述べた。

## 【終章】

ここでは、まず本論文の章ごとのまとめをした。

次に、羅山の思想の全体像を、朱子のそれと比較しながら、その特質を以下のように規定した。

一言で総括すると、羅山の思想は朱子学を根幹とし、したがって大枠においては朱子学とほぼ一致しながらも、重要ないくつかの点において朱子の思想から離脱する事実が看取される。

羅山の理気論以下文芸論までにみられる朱子の思想との差異点（五つに分けて示した）には、ある共通性が存すると考えられる。朱子は、その思想の基底をなす理気論をはじめ、人間観（心性論を含む）・道徳論・政治論・軍事論・文芸論など、いずれの論においても、太極＝理——諸々の事物の根拠にある根元的なもの——を最も重視し、理気論その他の各論の妥当性、正当性の根拠を、それらの論が太極＝理——根元的なものに根ざし、合致するところに見出していたのに対し、羅山は、理気論以下の論において太極＝理——根元的なものに依拠する度合いを著しく減じ、それと対照的に、現実の実際の場面における有効性を重視する度合いを朱子よりもはるかに増大させている、とみなしうる。私のいうある「共通性」とはまさにこの点なのである。

思想の大枠では朱子の思想に倣いつつ、朱子の思想にみられる、太極＝理——根元的なもの——の重視・依存の度合いを減少し、現実世界の諸々の場面における有効性の重視を朱子よりももっと増大する、——羅山の思想の特質は、朱子の思想と対比するとき、このように把握・表現することができるのであろう。

最後に、羅山思想の研究に関する今後の課題を五つほど挙げた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、序章、第1章から第5章まで、終章、あわせて7章からなる。

「序章」で論者は、林羅山（1583～1657）の事績を略述したのち、羅山の思想の研究史に説き及ぶ。すなわち、従来の研究は、①羅山の思想が朱子のそれと殆ど同一であるとする見解と②羅山の思想が、兵家や法家の思想をも摂取したところの、朱子の思想とは異質のものだとする見解に二分され、現在二つの見解が対立している事実を指摘する。

ついで、本論文の課題は、羅山の思想の特質を朱子の思想と比較しながら究明することだとのべ、本論文で採る方法は、羅山の思想を形造る主な思想的要素である、①理気論（思想の根底をなすもの）・②心性論（理気論に基づいて成立し、次の③具体論の根拠となるもの）・③排仏論・兵法論・文芸論（思想の具体論）を、朱子の①②③と逐一比較してそれぞれに見出される異同を摘出し、このような作業を通じて羅山の思想の特質を究明するものだとのべる。

「第一章 林羅山の理気論——理の解釈を中心として」では、「一、朱子理気論の基調」で先行研究によりつつ朱子の理気論の輪郭を記述する。「二、林羅山の理気説」では、「1、朱子理気論の原理面に関する理解」で、石田一良の、羅山は元和6年後朱子の理気説を理解・摂取したとの説によりつつ、羅山は元和6年以後朱子の理気説を理論面ではよく把握していた、と説き、「2、理気論の応用面——理の解釈をめぐる——」では、次の二つの事実をあげて、羅山が元和6年以後も理気論のいわば応用面において、朱子と重要な差異を持っていた、と説く。①朱子が人間の本性は理（具体的には仁義礼智信の五常）であり、この五常の性が人間の内奥にあって人間行為の究極の準拠となる、としたのに対し、羅山は仁義礼智信などを生活上の実際的心得や具体的道德規範や法律の類とみなしていたこと、②理を「国常立尊」と同一視していたこと、である。論者のこの指摘は、羅山理気説研究史の欠を埋めた重要なものといえる。

「第二章 林羅山の心性論——朱子・李退溪と比較しながら」では、「始めに」で、羅山にみられる、心と性と情、三者の関係論を、朱子や李退溪のそれと比較することを通じて、羅山心性論の特質をとらえる、とのべる。「一、朱子心性論の基調」では、朱子が①性は理であり、完全に善なる存在とみなす、②心・性・情の関係をめぐっては、構成からみて、心は性と情を内包するとみなし、機能からみて、心は性が情となって発動する過程に正しさを保障するとみなす、と説いた上、朱子では非道德的感情の由来やその制御法を求める志向は強くはない、と説く。「二、林羅山の心性論」では、「1、朱子の心性論に対する認識」で、羅山の心性論が外

形の上で朱子のそれと一致する、と説き、「2、羅山と『四七理気説』」では、朱子のいわば「情＝四端プラス七情」というとらえ方と違って、羅山が殆ど「情＝七情」ととらえたこと、さらに李退溪の四端七情説を改変・摂取して、七情は気から出るが故に、悪に赴く傾向を強く持つとみなしたことを指摘する。「3、心と七情」では、朱子が性（＝理）への厚い信頼の故に、情（性の発現したもの）の悪に赴く傾向をそれ程考慮しなかったのとは違って、羅山は七情の悪に赴く傾向を深く慮って、心による七情の制御法を強く説いた、と論ずる。この章の論述にはやや明確さを欠く面がなくもないが、注目していい羅山心性論への新見解が示されている。

「第三章 羅山の排仏論——朱子・韓愈との比較を通して」では、「一、朱子の排仏論について」で、朱子は、①人間本性を空かつ「作用」とみなす点を仏教教理の最大の誤りだとみなした、②人倫を無みすることからくる社会的影響をも批判しはしたが、批判の力点は、①の面に置かれていた、と説く。「二、林羅山の排仏論について」では、「1、仏教教理に対する批判」で、羅山の「仏虚儒実」の主張の内容が朱子と異なるとし、仏や仏教をあからさまに蔑視する点も朱子と異なり、韓愈に近似する、と論ずる。「2、仏教の社会的な影響に対する批判」では、羅山が仏教の社会に及ぼす悪影響を説く仕方は、朱子よりも韓愈に近似している、と説く。本章の論者の所説は、朱子との違いを摘出しつつ、羅山排仏論の特色を的確に把握したもので、研究史上の意義が大きい。

「第四章 林羅山の孫呉兵法観——朱子・南宋事功派との比較を通して」では、「一、朱子の孫呉兵法観」で、朱子の道徳中心の軍事観を宋代同時期の事功派陳亮の軍事観と比較しつつとらえる。朱子は①軍事という活動が道＝理に基礎を置くときはじめて成立する、とした、②皇帝ないし王の「正心誠意」による道の体得こそが軍の本だとした、③孫呉の兵法を道＝理からはずれるものとみなして、政治や軍事の場面での利用を拒否した、と論ずる。「二、林羅山の孫呉兵法観」では、「1、羅山の孫呉兵法認識」で、羅山は孫呉の兵法は「イツハリ」で、孔孟の「仁義の道」に一致しない、と認識した、この見地は朱子のそれと一致する、と説く。

「2、孫呉兵法の使用について」では、羅山は、「仁義之兵」を理想としながら、現実には孫呉兵法の使用を容認した、この態度は、「王覇併用」を説く事功派のそれと似ている、と説き、加えて、羅山は孫呉の兵法など（『三略』も含む）を、軍事の領域を超えて、政治の場面でも採用しようとした、この点は朱子の見地とはもちろん、事功派の思想とも異なる、と論ずる。本章の記述は、視点・方法の上でも、成果の上でも、新鮮味に溢れ、本論文中最も読みごたえのあるものとなっている。

「第五章 林羅山の文学論——道文関係論をめぐる林羅山と朱子の比較研究」では、「一、朱子の道文一致論」の「1、朱子の道文一致論」で、朱子は①文は道を載せるものである、②よ

い文章は、道＝理を明らかにすることと「不二」である、と主張したと説く。「2、道・文関係論の問題をめぐる朱子の文学批評」では、朱子は上記①②の見地をその文学批評の基本に据えていた、そして、蘇軾と韓愈の道文関係論を道と文とを二物に分裂させるものとして批判した、と説く。「二、林羅山の『道徳文章不二論』」では、「1、問題の発端」で、「道文不二」・「道本文末」などの語を用いた羅山の道文関係論と、朱子と違って韓愈や蘇軾を肯定的にとらえる文学批評との間に矛盾がみとめられる、とのべる。ついで「2、羅山の道文関係論の基本思想」で、羅山は①朱子が道（理）の文（文章）に対する絶対的優位を強調するのと違い、文のもつ意義や役割を朱子以上に力説する、②文に道徳的内容を求めるとともに、文学としての表現をも別に必要とみなしており、この文章の内容と表現とを二つに分けてとらえる羅山の見地は、朱子に批判された韓愈や蘇軾の文章論と共通する面をもつ、と論ずる。加えて、羅山には、朱子と異なって・文章表現上の技法を必要視する見地が明らかに認められる、とする。この章の記述は、朱子や韓愈・蘇軾と対比しつつ、羅山の文学論の特色を従来の諸説よりもはるかに鮮明にとらえている。

「終章」では、第1章から第5章までの記述をまとめるとともに、羅山の思想が全体として持つ特色を次のように説く。「思想の大枠では朱子の思想に倣いつつ、朱子の思想にみられる、太極＝理——根元的なものの重視・依存の度合いを減少し、現実世界の諸々の場面における有効性の重視を朱子よりももっと増大する、——羅山の思想の特質は、朱子の思想と対比するとき、このように把握・表現することができるであろう。

総じて、本論文は、羅山の思想の主要な要素と朱子のそれとの詳細な比較を通して羅山の思想の特色を究明するという方法を、研究史上はじめて採用し、いまだ活字化されていない羅山の著作類を読破しつつこの試みを遂行することによって、新たな羅山の思想の像を構築することに成功している。論者のこのような考察と成果とは、羅山の思想の研究の進展のみでなく、近世思想研究の進展にも大きく寄与するものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。